

〔PBLの風と土 第35回〕

隣で<これ何ですかね…>と言ったら

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でのPBL（Problem-Based Learning）の導入で知られており、現地から本連載を始めました。

連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにAAU以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題し、8年目からは再び筆者の教育実践を紹介中です。

1. 「これ」と「アレ」のあいだ

しばしば、「これ」は何かと問われる場面に身を置くことがある。好奇心が旺盛と言えば聞こえはよいが、対話の幅を広げることへの関心が高いため、直接問われていない場面でも周囲の会話に入り込み、「それはね…」とつい言葉を重ねてしまうこともある。しかし、この夏、学生と訪れたレストランでの夕食の際、「これ、何の肉ですかね…」という呟きを耳にしたとき、とっさにどう返すべきか戸惑った。最初に浮かんだ返答は「見てわからないなら、食べてみたら？」であったが、そもそもなぜそれが気になるのかという点が気にかかり、「アレルギーがあるの？」などと踏み込んで尋ねれば、かえって答えにくい問いを突きつけることになるのではないかと案じたのである。

「これは何の肉か？」という問いには、宗教や文化の違いから「自分が何を口にするのか」を慎重に確かめたい場合も含まれる。しかし、この場



写真1：ホテルでの「おまかせ定食」の様子  
（筆者撮影、2025年8月20日、一部トリミング）

面は「肉」か「魚」を選ぶ「おまかせ定食」において、単に「肉とは何の肉なのか」という素朴な疑問が生じただけのようであった。遠目には照り焼きのように見えたので「おそらく鶏かな？」と答えたが、よく見ると生姜焼きのようでもあり、「もしかしたら豚かもしれない」と言葉を重ねた。筆者は魚を選び、提供された鯖の味噌煮であることは見た目からも味覚からも明らかであったが、肉を選んだ学生は「最後までわからなかった」という結果となり、いわば正体が判然としない一皿を前にすることになった。

社会心理学、なかでもグループ・ダイナミックスを専門とする筆者にとって、「これ」が何であることを説明できるということは重要なテーマの一つである。杉万（2013）によれば、「これ」が何かを認識しているとは、「場所的・時間的・特徴的なコレが、超場所的・超時間的・普遍的な意味として現前する」（p.123）ことである<sup>1</sup>。すなわち、われわれが目目の前の対象を説明できるとき、その物理的性質だけでなく意味的側面もあわせて理解している。したがって、「これ」を「あれ」あるいは「別の何か」との共通性や異質性をもとに区別し、時に関連づけながら特徴を説明することが可能となるのである。

前回の連載の結語で筆者は、「日常の実践のなかでふと立ち上がる素朴な疑問が、どのように学びの出発点となるのか」に触れつつ、「探究の大切さに焦点を充てる」と記した。例えば筆者は「この肉」が何の肉かを知りたいという学生の関心に対して、日頃からコンビニエンス

ストアやファミリーレストランなどの食事が主となり、提供されるメニューから選ぶ習慣が定着しているため、むしろ食材そのものの目利きができていないのではないかと、といった想像を巡らせる。このように、食べ物一つの疑問からでも生活や自己のあり方に関わる問いへと昇華できるとともに、そうした問いを掘り下げるプロセスが具体的な体験としてさらなる学びと成長の手がかりとなる。そこで今回は、本連載の第32回で概略のみ示した立命館大学のサービスマーケティング科目「現代社会のフィールドワーク」を事例に取り上げ、「これ」が何かを意味の側面まで説明できるようになることの意義について検討していく。

## 2. キュレーションメディアから離れる

今回取り上げる「現代社会のフィールドワーク」は、立命館大学の教養教育カリキュラム改革を契機として2012年に開講された科目である。フィールドワークは厳密には研究法の一つであるが、それを参加型学習の教育法に組み込み、80名規模の授業として設計した。開講当初は2名の教員が2キャンパス（衣笠キャンパス、びわこ・くさつキャンパス）で担当していたが、2015年の大阪いばらきキャンパス開学を経て3名体制となり、2025年度には4名で担当している。到達目標は全クラスで共通としつつ、構成や内容は担当教員が工夫している。筆者のクラスでは、2012年度から一貫して授業の導入部において、「『複雑に入り組んだ現代社会に鋭いメスを入れ、さまざまな謎や疑問を徹底的に究明する』というフレーズはテレビの中だけのものではなく、むしろ誰もが率先して『問い』に向き合うための合い言葉として携えてよい』と示している<sup>2)</sup>。

特に関西圏の文化に馴染みのある読者は、ABCテレビ『探偵! ナイトスコープ』における冒頭の口上がここに埋め込まれていることに気づくだろう。この「謎や疑問を徹底的に究明する」ために、筆者は2012年度の初年度から「まわしよみ新聞」と呼ばれるワークを導入してきた。これは、筆者が当時身を置いていた浄土宗寺院「應典院」（大阪市天王寺区）において、総合芸術文化祭「コモンズフェスタ」に実

行委員として参加していた陸奥賢さんが1998年からの活動を背景に考案したものである。2012年8月の企画会議で「新聞を使って遊ぼう」と持ち込まれたアイデアが端緒となり（[まわしよみ新聞実行委員会, 2014](#)）、複数回の試行を経て、その手法が確立された（図1）。

筆者がこの「まわしよみ新聞」を授業に取り入れた理由は、受講生にキュレーションされたメディアから距離を取る体験を提供するためであった。一般にキュレーション（curation）は芸術作品の収集・選定に携わる専門職（curator）に由来するが、この概念は現在、インターネット上の情報の整理・選別にも転用され、メディアリテラシーの観点でも用いられている（例えば、[中橋, 2017](#)）。スマートフォンでの情報収集が日常化している大学生にとって、ブラウザのキャッシュやCookie、アカウントに紐づいたメタデータに基づき、ユーザーに「賢く」情報が提示される状況は便利である反面、情報の取捨選択や信頼性判断を自ら行わずに、受動的な情報消費者、場合によってはフェイクニュースの再生産者となる危険性を孕んでいる。

そこで筆者は、受講生が持参した新聞を「まわし読み」し、興味記事を切り抜き、壁新聞風に再編集するという実践を通じて、キュレーションされたメディアとの距離感を調整する機会を設けてきた。同じ日の同じ地域の新聞であっても、紙面構成や記事の論調、扱い方が異なることを体験的に学ぶことができるためである。コロナ禍で対面授業が制限された2020年度には、受講生向けに「一人まわしよみ新聞」の作り方を提示いただき、感染症法上の位置づ



写真2：「まわしよみ新聞」の様子  
（筆者撮影、2012年11月13日、立命館大学衣笠キャンパス）



図1：「まわしよみ新聞」の作り方（陸奥賢さん提供、<http://www.mawashiyomishinbun.info/about/>にも解説あり）

けが「5類」となった2023年度まで、対面・非対面を問わず提供し続けた。仲間との「まわし読み」でも、一人での「まわし読み」でも、複数のメディアを単に「見る」のではなく「読む」、さらには「読み込む」ことで、ポスト・トゥルース時代におけるファクトチェックの意義を実感できると伝えてきた。2024年度の受講生から寄せられた感想には、「他のメンバーの関心を知ることができ、貴重な体験だった」（国際関係学部3回生）、「興味がなくても目

を引かれる記事が多く、それに巡り合えるのが面白い」（文学部1回生）、「世の中の出来事に切り込む力や知識を蓄えることの大切さを実感した」（産業社会学部1回生）など、その意義を示す内容が見られた。

### 3. 留学生の投稿記事でロールプレイ

筆者が担当する「現代社会のフィールドワーク」では、2013年度以降、考案者の陸奥さんをゲストに招いて「まわしよみ新聞」を実施してきた。しかし2025年度は、筆者からの日程調整が遅くなり、授業の開講日である火曜日に立命館大学衣笠キャンパスへお越しいただくことが叶わなかった<sup>3</sup>。そこで、冒頭で紹介した「これ、何ですか…」のエピソードが思い起こされた。実はあの場面は、筆者が参加するJSPS 科研費22H00671のプロジェクト「多文化共生を考える夏合宿 in 大崎」（2025年8月20日～21日）での一コマであった<sup>4</sup>。その記憶から、「自らの想像力をどう磨くか」「新聞記事を別の形で活用できないか」と考えるようになった。

JSPS 科研費22H00671のテーマは、「理論と実践の往還を通じた越境的学びによる日本語教師養成プログラムの開発と検証」である。筆者は、市民性教育を重視した複数大学での科目設置に向け、多文化サービス・ラーニングの開発にアドバイジングを行ってきた。その過程で、共同研究者である東北大学・澤邊裕子教授より、河北新報の投書欄「留学生の視点」を活用した

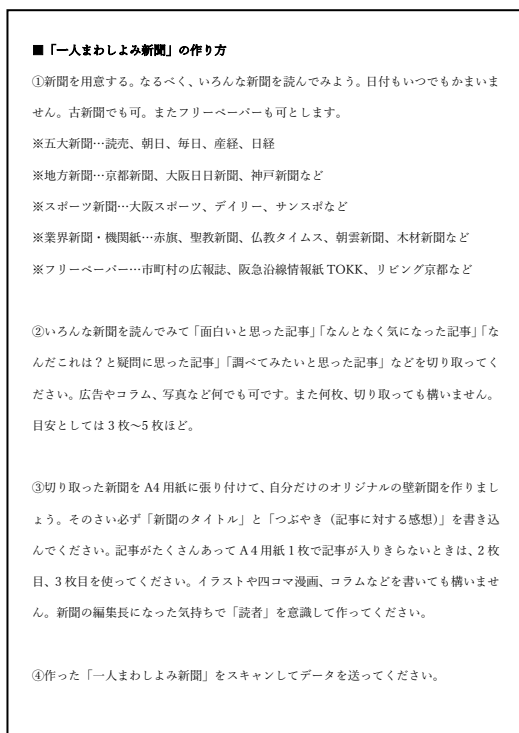


図2：「一人まわしよみ新聞」の作り方（陸奥賢さん作成・提供、2020年10月1日作成）



写真3：新聞記事でのロールプレイのタイムテーブル  
(筆者撮影、2012年10月7日、立命館大学衣笠キャンパス)

授業のアイデアを共有いただいた。そこで、立命館大学での実施にあわせてタイムテーブルを検討し(写真3)、2025年9月4日の紙面を入手した。そして、図3のワークシートを作成・配布し、5名(最大6名)のグループワークとして実施した。その結果は次ページの図5に示している<sup>5</sup>。

今回のワークのポイントは、「他者になる」体験を重視したことである。まず6名の留学生が日本での生活で抱いた違和感、具体的には(A)コンビニ周辺にゴミが散乱していた、(B)家族とのビデオ通話でお米価格の高騰が話題になった、(C)区役所では自分の名前を長いカタカナ表記での手続きが求められた、(D)店内アナウンスが頻繁に流れるために何が重要かわからなかった、(E)エレベーター内が静かすぎて緊張した、(F)学食の揚げ物が多く栄養が偏ってしまいそうだ、これらの投書をグループで「まわし読み」する。その後、話題とする記事の一つを選び、ワークシートに沿って(1)どんな場面か、(2)留学生は何を発見したか、(3)何に疑問を抱いたか、(4)どのような意見を述べているか、状況、事実、感覚、提案の4つの観点を区別しながら記事を要約する。さらに、多文化共生の観点から何が問題となりうるのか、投稿者以外の環境ともどう関係しているのか、そして「自分がもしその場にいたらどうするか」を考える。これらをグループ内で擦り合わせ、最後に寸劇として表現する、という流れでワークを行った。

#### 4. コレは何かよりアレとの関係を探究

このワークの本質は、市民性の涵養にある。本連載第21回では、市民性教育を「専門性に対する幅広い知識・スキル・態度の習得を通じた模範的な人格形成」と位置づけた。今回の実践では、その模範的な人格形成を、留学生による新聞投稿を手がかりとして、多文化社会の共創という観点から捉え直した。図4で共有した受講生の省察は

現代社会のフィールドワーク 第4回 (学術論文440)

新聞記事読み解きワークシート

【 】 グループ (参加者名: )

1. 要約 【(A)こみ (B)お米 (C)名前 (D)アナウンス (E)静けさ (F)学食】  
この記事は ( ) 人が以下の事を記した

場面 (状況)	
発見 (事実)	
疑問 (感覚)	
意見 (提案)	

2. 読み解き 【個人の問題、組織の問題、社会の動向の問題、責任の重なりなど問題になっていることは？】  
(1)この記事の中で問題になっていることは？  
  
(2)それは社会全体にどう関係している？  
  
(3)自分がその場にいたらどう感じ、どう行動するか？

3. ロールプレイ (寸劇) 【記事の状況をもとに、2〜3分程度の会話を作って演じる】  
例：こみ→コンビニでゴミが散乱している場面を再現  
お米→留学生が家族とビデオ通話で話している場面を再現  
名前→区役所での窓口対応を再現  
アナウンス→よく行く店のアナウンス内容を再現  
静けさ→エレベーターに乗って降りるまでの緊張感を再現  
学食→食堂で学生が「揚げ物ばかりですね」と友人に話す場面を再現  
ポイントは、会話の中に「自分ならどう対応するか」「市民としてできる行動」を盛り込むこと！  
その上で、「2.読み解き」や「1.要約」が適切にできているかを確認しよう！

10/21 (第4回) のフィールドワーク先 (行ってみたい場所、触れてみたい場面、見てみたい状況) の候補は？

図3：新聞記事読み解きワークシート (筆者作成)

長大であるが、「学生たちが地域の現場で違いを越え互いを対等な仲間として思いやることのできる関係性を経験し、その関係性から見える社会を想像すること」(澤邊ほか, 2025, p.45) ができていたと読み取れる。事実、学生から寄せられた感想のうち、積極的に共有を希望したものの中には、「五感で感じながら考えれば、もっと気づけることがあるのではないかと思います、若干のもどかしさを感じた」(産業社会学部2回生)や、「思いやりの形が一面的になると、かえって他者を排除することもあるのではないかと感じた」(文学部1回生)といった記述が見られた。

一方で、学生らによる省察からは、これらのワークが単に成果物を作成する演習に留まらない学びの過程にあることが確認できる。切り抜いた新聞記事を貼り付けて壁新聞風に再編集した四つ切り画用紙や、グループディスカッションで用いたワークシートなど、「成果物」そのものを作ることが目的ではない。あくまで、物の見方を豊かにすること、そして安易にインターネットで「正解」を探すのではなく、謎や疑問を徹底的に究明するフィールドワークを実践することに目的がある。読み解きは、問いを設定し、研ぎ澄ますための手段にすぎない。作家・高橋源一郎は、『サンデー毎日』の連載「こ



れは、アレだな」(高橋, 2022)で、「気になった『これ』に似ている『アレ』を森羅万象の中から探し出す」(p.219)という楽しみを綴っている。それは「これ」が何であるかの答えを掴むより、別の「アレ」との関係を探りながら問いを深めていくプロセスが「世界を豊かにしてくれる」(高橋, 2022, p.3)という姿勢である。

今回、冒頭で紹介した「これは、何の肉…」のエピソードを環境教育を専門とする知人に話したところ、「記号接地問題」と関連づけて捉えてみてはどうかと助言をいただいた。「記号接地問題」については、発達心理学者・今井むつみと言語学者・秋田喜美の共著『言語の本質』(2023)に平明な解説があり、そこでは「身体感覚を経験につなげられていない(接地していない)記号同士を操作して、言語の本当の『意味』が学習できるのか、という問題」(p.253)と整理されている<sup>6</sup>。さらに今井(2024)は、著書『学力喪失』で、生成系AIの

時代において「AIはどんな概念も『(人間にとって)あたかも理解しているように思える答えを出力している』だけで、『理解する』という状態をもたない」(p.198)と述べる。これに対し、人間は「個別の単語の意味を自分で推論することで学びながら、同時に語彙についての暗黙知である『スキーマ』を学び、身体化していく」(p.220)という。

すなわち、今回の実践で目指したのは、情報を集めて正答を導く「知識型の学び」から、他者や環境との関係性の中で意味を手繰り寄せる「記号の接地を伴う学び」への転換である。こうした関係性の中で生まれる意味づけこそが、市民性教育における経験の核心である。そこで今回は、「これ」が何かをフィールドワークで探るプロセスに浸る中で、どんな学びが得られるのか。令和6年能登半島地震から2年を、筆者がどのように迎えたのかという事例を手がかりに記してみたい。(gucci@fc.ritsume.ac.jp)

#### 【引用文献】

- 今井むつみ. 2024. 学力喪失：認知科学による回復への道筋. 岩波書店
- 今井むつみ・秋田喜美. 2023. 言語の本質：ことばはどう生まれ、進化したか. 中央公論新社
- まわしよみ新聞実行委員会(編). 2014. まわしよみ新聞のすゝめ. まわしよみ新聞実行委員会
- 中橋雄(編). 2017. メディア・リテラシー教育：ソーシャルメディア時代の実践と学び. 北樹出版
- 墨邊裕子・北出慶子・新矢麻紀子(2025) 市民性の涵養を目指した日本語教師養成：多文化社会の共創と日本語教育の接点からの展望一. 日本語教育(19), 34-49.
- 杉万利夫. 2013. グループ・ダイナミックス入門. 世界思想社
- 高橋源一郎. 2022. これは、アレだな. 毎日新聞出版
- 山口洋典・小辻寿規・秋吉恵. 2025. 立命館大学におけるサービス・ラーニングと地域連携：キャンパス特性を活かした学びと成長への教育実践とキャンパスを横断した地域貢献. 立命館高等教育研究(25), 1-18.

#### 【注】

- <sup>1</sup> この背景には、対象を捉える上では実体よりも身体との関係が鍵となる、という前提がある。この前提は、廣松渉(1982)による『存在と意味』(第1巻)の四肢構造論に拠っており、杉万(2013)の第6章で詳しい解説がなされている。
- <sup>2</sup> 全キャンパスで各クラス共通としている到達目標は次の3つである。(1)大学以外での学びを体験し、NPO等の組織マネジメントやリーダーシップなどへの関心が高まる。(2)現代社会の問題群に対する自らの関心を明らかにし、問題の当事者と解決の担い手が誰か理解する。(3)今後自らが習得すべき専門分野を踏まえ、問題解決への接近にどのような学びが重要を見つけ出す。なお、立命館大学におけるサービスラーニングセンターの取り組みについては山口ら(2025)を参照されたい。
- <sup>3</sup> 2012年は手法の開発時期ということもあり、筆者が進行役となって試行的に実施し、陸奥さんに大学で実施した際の受講生の反応や大規模人数での展開可能性などについてフィードバックした。
- <sup>4</sup> ホスト校である宮城女子学院大学による報告記事「【日本語教員養成課程】「多文化共生社会」と「防災」をテーマに夏合宿を実施しました」が2025年8月22日に公開されている。(https://news.mgu.ac.jp/jl/news/5631.html)
- <sup>5</sup> 本連載第21回でも立命館大学教養C群科目「現代社会とボランティア」の2021年度GAクラスで受講生による自己評価の結果を紹介したが、今回も株式会社朝日ネットのmanabaの掲示板で受講生と共有した内容を、了解を得て掲載する。
- <sup>6</sup> 今井(2024)は「『記号接地』とは人工知能と認知科学における長年の未解決問題である」(p.196)という。この問題がどのように成立したかを参照するため、以下に引用を付す。「1990年にスティーブン・ハルナッドという認知科学者が、当時のAIを批判して、記号接地問題(Symbol Grounding Problem)ということばでAIを特徴づけた。当時のAIは今と異なり、記号(ことば)を操作する記号アプローチが主流だった。記号の意味は人間が定義を与える。しかし、コンピュータはひとつひとつの記号(ことば)の意味を他の言語で記述しなおしているだけで、コンピュータが意味をほんとうに理解しているわけではない。」